

日本労協連は、4月9、10日の両日「自立・就労支援関連事業 全国研修」を開催、「分断と分裂を深める経済、社会体制の本質をつかみ、社会連帯と協同労働による地域づくりをどう進めていくか」をテーマに、社会的に困難にある人の自立と就労を支援する事業所・現場(生活困窮者自立支援、生活保護受給者の自立就労支援、地域若者サポートステーションなど)から90人が参加。研修全体の報告は別途に譲るが、ここでは「支援」の実践に携わる組合員の発言を通して、「協同労働」とは何か、協同労働による「支援」とは何か、を深く考えさせられる大きな機会になったので紹介したい。

研修の初日、生活困窮者の相談・就労などの事業所・現場に携わる若者たちから、「支援のイメージと実際、この1年で困ったこと、などについてディスカッションを行い、以下のような意見が出された。「支援を求める人を『対象者』ではなく、『働く仲間』だと考えるようになってから、『相手の見えている景色・光景』を本当に理解していなかった自分に気づいた」、「『支援をします』、ということではなく、同じ時間や経験(喜び、悲しみ、苦勞、達成感など)をいっしょに分かち合うことで、その方の変化や次につながる一歩になればという思いで、一人ひとりの方との出会いと関わりを大切にしている。その人にとっての課題解決の方向性、道筋をたてることで、最初のころは、『支援者』が安心していた。徐々に、それが目的じゃないことがわかってきた。

経験や知識が多い人生の先輩たち。地域は相談者がよくしている。私とこの人の関係性を考えると、同じ市民だ。専門用語を多く使う“専門職”が行う仕事というイメージから、軽くなった。相談に来る人の、長い人生の一部分に関わっていると思うと、その場面で必要なことをする。肩の荷が下りた」、「困難な状態は理解できても、当事者の心境までのリアルな想像ができず、人生経験の浅さを痛感している」、「対象者は何らかの理由でつまづいているのだから、それはその人の努力不足ではなく、『社会に問題がある、社会を変える必要がある』ということ、『対象者は可能性を持った一人の人間と捉える』ことだと考えている」、「支援をすると考えると、やれることがない。お金を貸してあげることができない。地域の情報は利用者がよく知っている。それを思い出してもらおうこと、それを手伝うことぐらい。自分の限界に気づいたら肩の荷が下りた」と。また、学童現場で学習支援を実施している仲間から「支援ではなく、協同の関係づくりが必要ではないか」という発言もあり、「支援」現場で日々苦悩と格闘を重ねている若者の「支援」の実際から、「協同の関係」づくりを進める支援のあり方について、その意味を学ぶことができた。

翌日には「主体性を育む学びの多様化～学習支援から地域づくりの主体形成へ」をテーマに学習支援のディスカッションが行われ、日胆まちづくり地域福祉事業所(北海道日高地域)の担当者の発言から、学習支援の

意味と協同労働の持つ可能性について考えさせられた。「苫小牧の若者サポートステーションで働いているとき、子ども時代の学習のつまずきが将来に影響を与えている現実に触れた。そのとき、ワーカーズの学習支援とは何かを考えさせられ、学習支援の現場に移った。私は、両親が公務員で、勉強して良い大学に入り、公務員になれば安心した暮らしができると子ども時代から思っていた。しかし、大学に進学して器量がないからか公務員試験に失敗、正規職の道がなくなり挫折、実家の役場の臨時職員になったが、思っていた公務員との違いを感じて1年で辞めて2度目の挫折をした。5年くらい無職で死ぬことだけを考えていたとき、2011年3月11日の東日本大震災があり、たくさんの人がなくなった。多くの人が生きようとしているのに死んではいけない、働かないとだめだと強く思い、苫小牧の若者サポートステーションの利用にたどり着いた。北海道の学習支援は、高校に進学、就職して貧困を食い止めることを目的にしている。しかし、大学に進学しても意味がない、とまでは言わないが困難は解決できない。私は、ワーカーズコープに入ってからいろんな人とつながることができた。組合員、地域の人、とつながれて自信になった。ワーカーズコープの働き方は、希望に満ち溢れている。その思いを持った人たちとなら、一緒に何かできる。なぜならワーカーズコープは希望に溢れる場所だと思うから。今33歳になったが、今までの人生でいちばん楽しい。子どもたちには、勉強は大事だがいろんな人と関わって、いろんな人の価値観に触れてほ

しい。学習支援では、そのことが大切だと思っている」と。

研修の中で下村幸仁さん(山梨県立大学教授)が講義の中で語られた「希望を持ってなければ、意欲がわかない」との言葉、「死ぬことだけを考えていた」との組合員の言葉、いまだに一日に7人の若者が自死する日本社会、今から15年以上も前に「この国にはなんでもある。だが希望だけがない」(村上龍「希望の国のエクソダス」、2000年)と主人公に語らせた、日本社会の絶望。

研修テーマであった「分断と分裂を深める経済、社会体制」の行き着いた先の絶望の本質をつかみ、当事者・市民の連帯で「協同労働による地域づくり」をどう進めていくのか、今後とも私たちワーカーズコープに課せられた課題である。

自立支援に関するそれぞれの社会制度(介護保険、障害者自立支援、生活困窮者支援、若者サポートステーション等)は、常に「支援する側」(提供側)と「支援される」(利用者)を分断・固定化する。制度の限界を超えて、制度を足がかりにしながら、その関係を超えるような当事者主体の実践、市民連帯による社会連帯活動の実践-共に学び、共に育ち合う協同の関係づくりをどう実践的に展開することができるか、自立支援に関する制度の本質を見極めながら、取り組んでいきたいと思う。

全国研修では、大高研道さん(聖学院大学教授)、また原田正樹さん(日本福祉大学教授)らにご講演、コメンテーターとしてご協力いただきました。この場を借りて感謝申し上げます。